

令和 6 年 4 月 19 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00519

研究課題名（和文）ラベリング理論の精緻化：中国語のスルーシングを通して

研究課題名（英文）Elaboration of the Labeling Theory: Through Sluicing in Mandarin Chinese

研究代表者

高橋 大厚（Takahashi, Daiko）

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：00272021

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：様々な個別言語に見られる、従来の理論からは予測できないような語順を生じる構文について、最近の生成統語理論における文構造に関する仮説であるラベリング理論による分析を追求した。中国語におけるスルーシング（疑問節の縮約）現象を端緒として、その他の言語の語順が関わる現象も考察した。文構造中の句のラベルを決めるために主要部が移動し、その結果通常とは異なる語順が生じるという仮説を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

様々な言語に見られる通常とは異なる語順が文構造上の理由から生じるという可能性を追求した。非常に大まかな述べ方をすると、文中の要素間に一致が見られる言語と一致が見られない言語では、後者の方に句構造における主要部（例えば、文の焦点を標示する機能を持つ語や動詞など）が通常とは異なる位置に生じる可能性があることを追求した。これは、個別言語間の文法的な差異がランダムに存在しているのではなく、一致の有無に合わせる形で生じているという可能性を示すものである。

研究成果の概要（英文）：This study explored the possibility of accounting for phenomena involving unusual word order by using the Labeling Theory, which has recently been put forward in the literature as a device to explain various syntactic phenomena. We began our investigation from the sluicing construction (or reduce wh-questions) in Mandarin Chinese and extended our scope to similar phenomena in other languages. We pursued the hypothesis that heads undergo movement to determine the label of the structure where they occur, resulting in an unusual word order.

研究分野：言語学

キーワード：句構造 ラベリング スルーシング 疑問節縮約 主要部移動

1. 研究開始当初の背景

生成統語論では従来、語順、構造のラベル、投射の方法などの様々な情報が組み込まれた文構造構築の理論が仮定されてきた(句構造規則やXバー理論など)。近年は、極小主義的な考え方のもと、文構造は単純にある要素と別の要素の2つを併合する操作のみによって構築され、最終的な文構造から読み取られる語順などの情報は構造構築以外の要因から導き出されるという考え方が追求されている。本研究は、特に文構造中の句のラベルは構造構築操作とは別のアルゴリズムによって決められると考えるラベリング理論を踏まえ、句構造の主要部の移動がラベリングの要請によって引き起こされるという仮説を検討した。

2. 研究の目的

個別言語には、従来の文構造構築理論からは予測されない語順を示す現象が散見される。本研究は、中国語のスルーシング(疑問節縮約)構文に見られる焦点標識が焦点要素に先行する語順を端緒として、そのような語順が句のラベルを決定するために誘引される主要部移動の結果として生じるという仮説を検証することを目的とした。

3. 研究の方法

- (1) 中国語のスルーシング(疑問節縮約)構文に関する先行研究を調査し、それがどのような構造を持つのかを明確にする。
- (2) 中国語のスルーシング(疑問節縮約)構文の構造を明らかにするために、その対照として別の言語の類似構文の構造を比較検討する。具体的には、データ入手が比較的容易な日本語、モンゴル語、ダガラ語(西アフリカで話される言語の1つ)のスルーシング(疑問節縮約)構文を調査する。
- (3) 中国語のスルーシング(疑問節縮約)構文に見られる焦点標識が焦点要素に先行する語順は、ラベル付けの必要によって引き起こされる焦点標識の移動により生じるという仮説の妥当性を、様々な統語構造を見分けるテストにより検証する。
- (4) ラベル付けの必要によって引き起こされる主要部の移動が他の構文や他の言語にも応用できないか検討する。

4. 研究成果

- (1) 文献調査により、中国語の焦点化構文では、元々は焦点要素が焦点標識に先行する語順であったものが、現代語では焦点標識が焦点要素に先行する語順に変わったことを確認した。この語順の変化を主要部(焦点要素)の移動に帰すという仮説の間接的な証左が得られた。
- (2) ラベル付けを理由とする主要部の移動は、中国語の当該構文だけでなく、英語における動詞の後に複数の要素(目的語や付加詞など)が生じている構文、英語におけるbe動詞が明確な理由もなく移動している現象、中国語のba構文や受身文にも適用できる可能性があることに気づいた。
- (3) 対照研究としてモンゴル語の疑問節縮約構文を考察した。当初の見当とは異なり、モンゴル語の当該構文は中国語とは全く異なる構造を持つことがわかった。本研究の主たる目的には整合しない結果であったが、考察の成果を国際共著論文(Bai and Takahashi 2023)にまとめることができた。
- (4) 対照研究として日本語の節省略現象を考察した。当初の見当とは異なり、主要部後置型言語である日本語で主要部移動の可能性を検証することは難しく、期待した成果を得ることはできなかった。しかし、考察を通して、日本語の当該現象が先行詞内削除という統語論あるいは統語と意味のインターフェイス研究における重要な研究課題に貢献できる可能性があることがわかった。その成果である論文が国際学術誌に掲載された(Takahashi 2024)。

- (5) 対照研究としてダガラ語の疑問節縮約構文及び焦点化構文を考察した。ダガラ語は中国語と類似した文法的な特徴を持つ一方で、焦点化構文では焦点要素が焦点標識に先行する語順を持つこと、さらに焦点要素と焦点標識の間に数の一致があることがわかった。このことは、焦点要素と焦点標識の語順が一致などのラベル付けの要因と関係していることの強い証左となった。考察の成果は国際共著論文として国際学術誌に投稿中である。
- (6) 上記(1)と(2)の成果については、まだ検討途中の要素が存在し、決定的な証拠や論拠を研究期間内に得ることができなかった。ラベル付けのための主要部移動という仮説の妥当性を今後も引き続き検証する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Bai Xue, Takahashi Daiko	4. 巻 32
2. 論文標題 A pseudo-sluicing analysis of reduced embedded questions in Chakhar Mongolian	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of East Asian Linguistics	6. 最初と最後の頁 497 ~ 522
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10831-023-09264-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Takahashi Daiko	4. 巻 -
2. 論文標題 Antecedent-contained argument ellipsis in Japanese	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of East Asian Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10831-023-09270-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Alain N. Hien and Daiko Takahashi
2. 発表標題 On Matrix Sluicing in Dagara
3. 学会等名 Nanzan University Comparative Syntax Workshop (招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------